

GUK初の快挙

九州シニアと九州ミッド シニアを同一年に制覇

《第32回九州ミッドシニア選手権》
通算1オーバー 145
八丁 禎二（九州八幡、65歳）



4カ月ぶり2つ目の九州タイトル。が、ただの2個ではない。これまで九州シニアと九州ミッドシニアの両タイトルを手にしたのは八丁が6人目となったが、同一年となると九州ゴルフ連盟（GUK）初。1年間での獲得がいかに困難であるかが分かる。

「周りからはシニアを取ったから、ミッドシニアも取れるやろう、と言われてプレッ

シャーもあった。おまけに、『勝てば史上初』と載っていたから余計にプレッシャーが」。八丁は初日2アンダー70をマークしてトップに立った。九州内のゴルフ大会を最も多く取材する熊本のメディアが「勝てば史上初」とSNSで紹介。これを見た八丁の両肩に優勝という重荷が加わる。

しかし、八丁は見事に跳ね返した。「同じ組も、前の組もうまい人は沢山いる。でも、取るのは今しかない」と自分を奮い立たせた。最終日、勝負は最後のバックナインに持ち込まれた。前半を終了して2位以下に2打差。八丁は優位な位置にいたが、12番のボギーで同組の野上英司（ミッションバレー、67歳）に並ばれ、13番の3パットボギーで逆転される。ここからである。14番から八丁は5ホール連続パーでしのぐ。逆に野上は5ホールで4ボギー。この間、同組の河口康広（司ロイヤル、65歳）の追い上げにあうが、1打差で振り切った。

「まさか取れるとは。UMK（九州シニア）では優勝とは思わなかったので（ウイニングパットは）『お先に』をしたけど、今回は1打リードが分かっていたので最後に打った。でも（優勝パットの）40cmが緊張しましたね」

2年半前に腎臓がんを患った。そこからウエートトレなどの体力作りに励み、体重を8kg減量。今では健康を維持し、競技ゴルフに集中する。苦手だったアプローチ、パターの練習を繰り返し、元々ドローヒッターだが、ショットの安定のためにフェードも取り込んだ。「ちょっとティーを低くしてね。だいたい4割はフェードで打つかな。ティーショットの方向性が安定してきた。パターも3パットが少なくなって、粘り強くなったと思う」。勝利には技術の向上が欠かせない。

普段は福岡市に本社があるJR九州エンジニアリング㈱の設備本部長の肩書を持つ。毎日、自宅のある北九州市小倉南区から福岡市まで通勤。「下期は決算もあるし、仕事をしないと。この後、ジャパンが2週連続あるので社長には許可をもらっています」。10月29日からの日本シニア（埼玉・飯能GC）と11月6日からの日本ミッドシニア（岡山・後楽GC）には気兼ねなく出場できる。大会へ向けては「シニアではシードを取れたら。水上さん（晃男、今年の日本シニアオープンで3度目のローアマ。日本シニア界のエース）がどんなゴルフをするか、一緒に回ってみたい。ミッドシニアでは優勝できれば。今しかチャンスはないですから」と秋の2週に向けて腕を磨く。